

令和3年度 東京都立野津田高等学校 学校経営報告

校長 池 戸 成 記

1 今年度の取組みと自己評価

(1) 教育活動への取組みと自己評価

①学習指導

<目標と方策>

- ICTの活用及びインターネット等を活用した学習方法の研究と実践に努め、デジタル社会に対応した新たな学習方法の構築に励む。
- 習熟度別授業の充実や少人数制授業の推進・活用により、「基礎・基本の徹底」を図るきめ細やかな指導を実践する。また、個に応じた指導の推進を図るため、補講や講習を充実させる。
- 各教科で、本校の実態に即した学力スタンダードを策定し、教材や授業形態、指導方法及び授業展開等の工夫に絶えず取り組み、生徒の興味・関心を引き出すとともに、「わかる」授業を展開し、「できた実感」を体験させる。
- 予習・復習の習慣化を図り、主体的に学習する態度を育成する。
- 福祉：地域や福祉施設と連携した実習を基盤に、自尊感情を育成するとともに、命に対する畏敬の念と人権尊重の心を養いながら、福祉に関するスペシャリストの養成に向けた指導を徹底する。
- 体育：スポーツが持つ、品位、結束、規律、尊重などの態度育成を第一義とし、社会に必要とされる人材の育成に努める。
質及び量ともに豊かな実技を中心とした授業を基盤に、技能向上のために自ら考え行動する態度を育成する。学校設定科目「専攻スポーツ」を充実させ、専攻種目における競技力の向上を図る。

<取組みと自己評価>

- 授業におけるICTの活用率は、約70%であった。板書とプリント、ICTそれぞれの特徴を生かした授業展開に習熟がみられるが、知識の獲得と活用につながるICT活用実績の更なる向上が必要。
- ・教科・分掌横断型の「教育情報部」を新設し、デジタル化への対応を強化した。研修会の実施を重ね、浸透、深化は図れてきている。コンテンツの質自体は高いものが多く、進路多様校として、復習やテスト学習に活用できる動画の作成やFormsによる確認テストなどの活用例が増えた。しかし、インターネットを利用したオンライン・オンデマンド学習については、教員間にまだ差がみられる。
- ・生徒に対するオンライン学習実態調査の回答率は1学年43%、2学年71%と低く、督促や指示に応じて上がる傾向がある。「TeamsのIDとパスワードを自分ですぐわかるようにはしていない」のは、そのうちの24%。「指示された課題はすべて期限内に取り組むようにしている。」は53%であった。配信内容と課題の設定、提出の簡易さなどの研究と同時に生徒の端末の活用を促す手立ての向上が必要である。**(評価B)**
- 生徒の「学習状況調査及び生徒による授業評価」(以下「調査」)において、「高校での学習の仕方が理解できる」という質問に「あてはまる」「ややあてはまる」という肯定的回答(以下「肯定的回答」)をした生徒は1年生が82%、2年生が84%、3年生が83%であった。また、「高校に入って得意科目ができた」という質問の肯定的回答は同68%、62%、68%であったことから、中学でつまづいた生徒たちが理解をしながら授業を受けていることがうかがえる。学校評価アンケートでは、「授業での説明や教え方は分かりやすいように工夫されて(して)いる」という質問に対し、生徒の肯定的回答は80~90%台であり、教員は98%が肯定的回答であった。教員と生徒の間に若干の認識の差はある

が、基礎基本の徹底を目指す授業の成果が伺える。

- ・反面、「苦手科目・わからない科目はない」という調査における肯定的回答は同 24%、22%、38%であり、また、授業全般について「少しわからないことがあり不安である」と「ついていけず非常に不安である」という回答も 10%強であった。理解度に関しては、科目ごとの差や、個人差があり、この課題に一層取り組んでいく必要性がある。
- ・家庭学習に関しては、時間が「確保できている」という調査で肯定的回答は同 60%、61%、54%と学年ごとの差がなく、取り組む生徒と取り組まない（取り組めない）生徒の実態が一定のまま学年が推移していくという結果となった。個々の環境に応じた学習習慣の育成が必要である。**（評価 B）**
- ・「福祉科の専門科目について技能や知識がより深まった」という調査では、「あてはまる」と答えた 1 年生が 72%、2 年生 50%、3 年生 76%であり、「まあまああてはまる」と合わせた肯定的回答は同 91%、89%、94%であった。また、「日常的なボランティア活動などを通して援助者としての資質を向上させることができた」という調査で、肯定的回答は 1 年生 81%、2 年生 89%、3 年生 82%であった。福祉科の教育課程の目的に対する成果が認められる。
- ・福祉科の国家試験合格率は過去 10 年間で 2 番目の高さであった。
- ・体育科において「専門種目について技能や知識が深まった」という調査で肯定的回答は 1 年生 87%、2 年生 89%、3 年生 81%であった。また、「選考以外の種目について、技能や知識がより深まった」という調査では。同 88%、79%、89%であった。専攻とそれだけに偏らない学習ができていると考えられる。
- ・スポーツが持つ、品位、結束、規律、尊重などの態度を育成し、社会に必要とされる人材の育成に今後も努めていく。**（評価 A）**

②進路指導

<目標と方策>

- 進路指導部が主体となり各学年との連携を図る。また、3 年間を見据えた系統的・体系的な進路指導計画を作成し、キャリア教育を全教職員で組織的に実施する。
- 各学年とも、生徒個々の適性や希望を把握し、その実態に応じて適切な進路情報を提供するとともに、ハローワーク等の関係機関と連携を密にし、適切な個別相談等を実施する。
- 進路ガイダンス、職業講話、企業見学、上級学校見学やインターンシップを通して、生徒が望ましい勤労観や職業観を身に付け、主体的に進路を選択決定していける能力、態度を育成する。
- 「進路だより」等を使い、定期的に進路に関する情報に触れさせることによって、進路に関する意欲や意識の喚起を図る。

<取組みと自己評価>

- ・1 学年と 2 学年に新たに「進路の手引き」を作成し、3 年間の系統的な進路指導計画の策定に着手した。「進路の手引き」は、その活用方法や内容を振り返り、今後 3 年計画で改訂していく。
- ・進路指導部と学年の間で、進路行事における主催分掌と主管分掌を整理し、責任と系統性を整理した。全体を見渡したつながりのある「野津田キャリア計画」の策定につなげたい。**（評価 B）**
- ・「卒業生の話を聞く会」の実施や、校外での進路行事など、新たな進路行事を実施した。精査しながら、スクラップ&ビルドを行っていく。
- ・昨年度からの取組である、1・2 年生二学期での進路希望調査実施、2 年生三学期での進路ガイダンス実施+志望理由書作成指導、業者を活用した進学模擬面接の実施、受験体験記の作成、拡大進路部会の実施等を引き続き実施した。**（評価 A）**

- 進路情報の発信にはまだ改善・発展の余地がある。全体のキャリア計画と進路の手引きとの互換性を保ちながらの計画を立てていきたい。**(評価 C)**

③生活指導

<目標と方策>

- 生活指導部が中心となって教職員と生徒の信頼関係を基盤とした全校体制の指導を行う。特に中途退学者の減少のために、きめ細やかで粘り強い生活指導を継続する。
- 生徒相互や生徒と教員間の「あいさつ」を励行するとともに、身だしなみを整える指導を徹底し、基本的生活習慣を確立する。
- 地域の関係諸機関と連携した交通安全、薬物乱用防止、SNSやインターネットの適正使用等のセーフティ教室や健全育成講話を実施する。
- 「時間を守る」意識の育成を図り、遅刻指導に取り組む。また、全教員で「チャイムで始まり」「チャイムで終わる」授業を実践すると同時に、机上・机下の整理整頓を徹底する。
- 「いじめのない学校」を実現する。いじめ対策として、スクールカウンセラーを活用し早期発見に努め、家庭との協力体制を構築し、生徒の悩みに対応することでいじめ防止を図る。
- 地域からの声に迅速かつ丁寧に対応し、特に交通ルールの遵守と、自転車通学のマナーを向上させるための指導を徹底する。
- 「東京都オリンピック・パラリンピック教育」の実施方針に基づき、「おもてなし」の精神を育成することによって思いやりや優しさを育む。また東京 2020 のレガシー構築を見据えた教育を実施する。

<取り組みと自己評価>

- 「校則の遵守」についての調査で、「しっかり取り組んでいる」と回答した生徒は、1年生 48%、2年生 49%、3年生 35%であり、「まあまあ取り組んでいる」と合わせると同 91%、89%、83%であった。教員の意識とさほど違いはなく、校則を守る必要性を理解し、取り組んでいるが、アプローチし続けないと乱れていくという実態もある。言葉遣い、礼儀に関する調査でもほぼ同様の数値が出た。
- ・学校評価アンケートにおいて、「頭髪や校則についての指導は納得できる」という質問に対し、生徒の 54~58%が「よくあてはまる」と回答しており、すべての学科で数値が上昇した。「ややあてはまる」と合わせた肯定的回答は 84~95%であり、生徒の理解と納得に基づいた粘り強い生活指導に取り組んでいると考えられる。
- ・中途退学率は昨年度の 2.5%から 3.1%に増加してしまっただが、直近 5 年間では昨年度に続く 2 番目に少ない数字であった。また、転退学に至るまでの指導や面談は粘り強く、かつ密に行えており、数字だけでは測れない指導が行えた。より個に応じた指導の徹底を図っていく。**(評価 B)**
- 調査における「チャイム着席・授業の準備」について、生徒の肯定的回答は 80%台であり、高い水準ではあるが、生徒の自発的な行動はまだ完全ではない。しかし、しなければならぬことは理解できており、自発的な行動に如何につながられるかという段階である。年間の総遅刻数は、近年で最も少なくなったが、更なる指導の浸透が必要である。**(評価 B)**
- 関係諸機関と連携した交通安全や、性に関する講演などに取り組んだ。コロナ禍もあり、地域との連携が薄かった。今後も多岐にわたる内容の講義に外部と連携しながら取り組み、生活指導上の課題を克服していく。**(評価 B)**
- いじめの認知件数は 0 件であった。しかし、人権を守れていない発言や行動が生徒間でしばしば見られ、特別な指導を要するケースもあった。今後も教科横断的にあらゆる機会を通して人権意識の醸成に努め、偏見や差別をなくすと同時に、いじめ根絶に向けて組織的な教育活動を行っていく。**(評価 B)**

④特別活動・部活動

<目標と方策>

- 専攻スポーツの物的・質的充実を図り、競技力の向上を図る。
- 科を越えた交流によって、部活動の活性化に取り組み、部活動を通じた学校への帰属意識や連帯感をもたせるとともに、生徒の健全育成を積極的に推進する。
- 文化系活動の表現の場を積極的に設け、生徒の表現力や意欲の向上に資する。
- 特別活動の意義を十分に理解し、野津田祭をはじめとする行事の運営を生徒が主体となって行えるよう支え、学校の活性化を図る。
- 生徒の人権を尊重した指導や自発的な活動を保障し、体罰・暴言のない指導を徹底する。

<取組みと自己評価>

- 物的環境や外部指導員の配置など、体制は整っている。コロナ禍における大会の中止や練習の制限などが生徒のモチベーションに影響を及ぼしており、メンタル面でのサポートが必要であった。顧問は指導上の柱となるべき事項を部同士で共有しながら、その難しい状況下でも生徒への指導を継続し、学校への定着に関しては一定の成果を見せた。一部専攻で昨年度を上回る競技成績を上げる成果が見られた。**(評価 B)**
- 学年の代替企画での交流や体育祭で福祉科と合同チームを作るなど、学科間の交流を図れたが、更に交流の場を意図的に増やしていく環境整備が必要である。コロナ禍において部活動への帰属意識が薄れたことによる指導の難しさがあった反面、部活動への帰属意識が学校へとつなぎとめていたことも成果である。**(評価 B)**
- 一部部活動はコロナ禍においても工夫を図り、演奏会や作品の出品などが出来た。また、研究を図る活動においても文化祭への出展など、活躍の場は最小限だが確保できた。部員勧誘や活動の制限などで、文化部については、目に見える活動が減り、部員減による存続の危機にある部もある。しかし、学校評価アンケートでは「部活動や学校行事が盛んにおこなわれている」という質問に対し、全学科で否定的回答が前年度と比較してすべて減少し、肯定的回答に転じた。部員増につなげ、部活動の活性化を図りたい。**(評価 B)**
- 縮小開催された野津田祭では、特に体育部門において、教員が一切マイクを持たない運営がなされ、生徒の成功体験につながった。学校説明会において生徒会や福祉科の生徒が説明を行うなど、コロナ禍でも生徒が前面に出る活動が増えた。今後さらに生徒の自発的な活動を増やしていけるきっかけとなった。体罰認知は0件。**(評価 B)**
- 避難訓練をより実際に近い状態を想定したものとするとともに、校内マニュアルを改定した。完成ではないが、より実践的な訓練への足掛かりとなった。引き続き取り組んでいきたい。**(評価 A)**

⑤健康づくり

<目標と方策>

- 学校保健計画に基づき、生徒の健康の保持増進を図り、安全確保を徹底する。特に感染症対策など、今日的な課題について組織的に対応するとともに、生徒が当事者意識を持てる指導を図る。
- 環境美化を重視し、美化委員会を中心とした生徒の自発的な清掃活動を推進する。学習環境の整備や保全に心がけ、美化活動を通して生徒の豊かな心を涵養する。
- 生命尊重の視点に立ち、「SOSの出し方」や、不登校や自殺等対策に資する教育の推進として、積極的なスクールカウンセラーの活用を行い、教育相談体制の活性化を図る。教育相談委員会を定例的に実施し内容の充実を図る。
- 教育相談委員会を中心に、特別支援教育や日本語支援を必要とする生徒へのきめ細かな対応に心がけ、学校全体で特別支援教育の推進に取り組む体制を充実する。

- 体育の授業において運動量を確保するとともに、スポーツテストの結果をフィードバックし、基礎体力の向上を図る。また、部活動を通してバランスのよい体力づくりを取り入れる。

<取組みと自己評価>

- 感染症対策を中心に、保健部及び全教員で啓蒙と対策にあたった。感染者は出たものの、その対応、報告などが統一できた。形のないものへの恐怖感を払しょくできなかったところがある。感染症に対する一層の理解に取り組み続ける（正しい恐れ方を徹底していく）必要がある。**(評価 B)**
- 美化委員会を中心に環境美化に努め、分別を徹底すると同時に、生徒主体の活動を推進した。若干停滞したところが見られたため、来年度に向けてさらに活性化させていく方針である。**(評価 B)**
- 生徒に寄り添う指導と観察を徹底し、教育相談員会の活性化が見られた。外部専門家によるケーススタディー会議を2度行い、特別支援学校への教員研修派遣、産婦人科医による講演で命の大切さをテーマにするなど、保健部、教育相談員会、養護教諭やSCを中心に生徒の支援を行えた。個別の指導計画が作成しきれていないところがあった。学校評価アンケートでは、「先生は自分たちの意見や悩みに適切に応じてくれている」という設問に対し、否定的回答全てが昨年度から減少し、肯定的回答が80~90%台となった。しかし、教員の評価では「よくあてはまる」が68%あり、生徒の30%前後とは認識に隔たりがある。**(評価 B)**
- 体育の授業では、授業時間の短縮や持久走の取りやめなど、年間計画の変更を余儀なくされた。また、部活動の自粛期間もあり、生徒の運動能力の向上は予定通りではなかった。その中でも、部活動の戦績など、一定の効果が見られた。**(評価 B)**

⑥募集・広報活動

<目標と方策>

- ホームページを随時更新し、地域の方々や中学生、その保護者に本校の日常の教育活動を速やかに発信する。
- 学校見学会・学校説明会・体験入学等を積極的に開催して、本校の特色及び各学科の特徴を中学生とその保護者に丁寧の説明し、明確な目的意識をもった意欲的な生徒の募集を目指す。
- 出前授業や模擬授業等、校外の募集活動に積極的に参加するとともに、部活動体験の回数を増加することにより、特に近隣中学校との連携・交流をより一層推進していく。
- 一学年生徒による母校訪問を行う。また、全教職員体制で市外を含めて中学校を3校以上訪問する。さらに、体育科の専攻スポーツは、体験入部（説明等）を3回以上実施する。

<取組みと自己評価>

- ホームページの更新は昨年度を上回り、近年では最も多くの更新を行った。中学生向けのコーナーの停滞や、古い記事の削除などが追いつかないところがあり、新年度からのHPの移転を機に、より学校の魅力を伝えられるコンテンツとして位置付けていく。学校評価アンケートで保護者からは配布プリントの掲載などの要望が寄せられたため、年度途中から対応を始めた。**(評価 B)**
- 感染症対策により、出前授業や母校訪問、部活動体験は予定通り進まなかった。感染症対策をとりながらも新しい募集対策の発想を持たねばならない。学校見学会は昨年度の倍以上の来校者であったが、学校説明会の参加者は昨年度比68%であり、一昨年度とほぼ同数となってしまった。応募倍率は、過去5年間で福祉科は3番目の数値であり、体育科では最も低い結果となった。募集対策を抜本的に見直すと同時に、学科の教育目的やアドミッション・ポリシーの再考などが必要である。**(評価 C)**

⑦学校経営・組織体制

<目標と方策>

- 「野津田高校グランドデザイン」を基に、企画調整会議と教科主任会を経営の基盤に据え、経営課題の解決と経営方針の徹底を図り組織的な対応力を高める。
- 経営参画ガイドラインに基づき、経営企画室における業務執行の適正化を図り、透明性を担保した執務の励行を行う。
- 教科指導力向上のために、「教員相互の授業参観」を年間10回以上行い、研究と修養に努める。また、他校の模範授業の参観など、積極的に校外での研修に参加し、研鑽に努める。
- 内部評価及び外部評価の結果に照らして、改革や改善を常に意識することで、創意工夫のある教育環境を整える。
- PTAや同窓会と緊密に連携し、共催事業を実施することにより教育活動を充実させる。
- 保有個人情報の管理を徹底することにより個人情報紛失事故を0とする。そのために、クリーンデスクに取り組み、机の施錠と使用する施設等の施錠を徹底する。
- 会議の効率化、コミュニケーションの充実、業務の簡素化等を図り、教職員のライフワークバランスを重視した学校経営を行う。

<取組みと自己評価>

- 特に教科主任会は昨年度以上に活性化し、新学習指導要領に向けたカリキュラム・マネジメントに取り組めた。**(評価A)**
- 研修が十分に積めない状況下で、教科指導力向上のための校内相互授業参観を奨励した。一部授業参観の回数が目標に満たず、他の教員の授業への関心が高まらなかった層もあったが、特に若手教員は、相互研鑽の意識が高く、競うように良い授業を行おうと向上心を持って業務にあたることができた。それが生徒の授業アンケートに対する好評価につながっていると考えられる。さらにオープンな授業の形態を目指す。**(評価A)**
- PTAや同窓会との交流には工夫を持てず、特にPTAとのアイデアの共有や新しい試みに欠けてしまった。コロナ禍であっても開かれた学校をどう実現していくか、外部の声を聴きながらの運営に努めたい。**(評価C)**
- 個人情報関連の事故は0であった。ダブルチェックで防げた事故もあり、それ自体は評価できるが、結果でとらえるのではなく、日常の運営を評価していきたい。教員間のコミュニケーションは概ね図られており、その雰囲気や事故防止に活かしていく。**(評価A)**

(2) 今年度の重点目標と方策

※囲み数字は昨年度を上回ったもの

①基礎学力の定着と進路実現の推進

項目	目標数値	今年度の数値	前年度以前の数値
中途退学率	2.0%	3.1%	2年度 2.5% 元年度 3.6% 30年度 5.1%
進路決定率	普 95%以上 福 95%以上 体 95%以上 大学進学率 25%	84% 94% 90% 25%	2年度 89% ※3学科合わせて未定者は2名 2年度 84% その他の未決定者は進学準備等 2年度 93% 2年度 26% 元年度 16% 31年度 21%
授業満足度	85%	85%	2年度 81% 元年度 69% 30年度 73%
夏期講習	募集 35 講座 開講 20 講座 延べ参加人数 300 名	募集28講座 開講20講座 延べ参加人数 206名	2年度募集18講座 開講13講座 延べ参加人数113名 元年度募集32講座 開講18講座 参加延べ人数 286 名

②普通科・福祉科・体育科の個性化・特色化の推進

項目	目標数値	今年度の数値	前年度以前の数値
生徒の入学満足度	85%	一年生 普 84% 福 66% 体 79%	2年度一年生 元年度全体 69% 普 82% 福 95% 体 90%
介護福祉士 国家試験合格率	100%	94% ※過去 10 年間で 30 年度に次ぐ 2 番目	2年度 84% 元年度 88% 30年度 96%
応募倍率	普 推薦1.80倍 一次1.10倍 福 推薦2.00倍 一次1.10倍 体 推薦2.00倍 前期1.10倍	普 推薦1.30倍 一次0.88倍 福 推薦1.20倍 一次0.48倍 体 推薦1.25倍 前期0.38倍	2年度 1.65 倍 元年度 1.13 倍 2年度 0.79 倍 元年度 1.05 倍 2年度 2.90 倍 元年度 0.90 倍 2年度 0.96 倍 元年度 0.27 倍 2年度 2.00 倍 元年度 2.25 倍 2年度 1.08 倍 元年度 1.17 倍
HP更新回数	200 回以上	277 回	2年度 248 回 元年度 212 回
部活動加入率	60%以上	59%	2年度 58% 元年度 51%
部活動実績		陸上部 女子やり投げ 東京都大会優勝・関東大会優勝 女子バレー 東京都新人選手権大会 ベスト 48 男子サッカー 全国高校サッカー 東京都予選ベスト 64	

③基本的生活習慣の確立

項目	目標数値	今年度の数値	前年度以前の数値
いじめ対応件数	0 件	0 件	2年度 1 件
体罰、暴言	0 件	0 件	2年度 0 件
皆勤生徒数	各学年 20 名	1 学年 25 名 2 学年 27 名 3 学年 11 名	2年度 1 学年 20 名 2 学年 15 名 3 年生 19 名
年間遅刻 延べ回数	4000 回	4288 回	2年度 6315 回 元年度 6068 回 30年度 7146 回

2 次年度以降の課題と対応策

「スクール・ミッション」と「スクール・ポリシー」に基づいた教育活動を図る

(1) 学習指導

- ①基礎・基本の重視、授業規律の徹底を基盤に、「わかる・成長する」学習指導を推進し、学習への苦手意識を持つ生徒を減らすとともに、上位層を伸ばし、中位層を引き上げる。
- ②教員相互が学べる研修・研鑽の機会を創出することによって、「成長できる職場」を目指し、生徒への指導に還元する。
- ③新学習指導要領に基づき、生徒の資質・能力を伸ばす教育課程を遂行する。そのための研修・研究に取り組む。
- ④一人 1 台端末及び CYOD を活用した学習家有働を充実させ、デジタル社会に臨む生徒の育成を図る。

(2) 生活指導

- ①人権尊重・他者尊重を基本とした指導の徹底を図り、規範意識の育成と醸成を図る。

②時間の遵守、挨拶、身だしなみ、私物の整理整頓など高校生としての基本的な生活態度・習慣の定着に向けて、引き続き全教職員が組織的かつ積極的に取り組んでいく。特に遅刻指導と自転車のマナーについての指導には重点を置く。

③教科横断的に主権者教育を図り、社会的、職業的自立を図るとともに、自ら学び考え、行動できる「自己教育力」を育成する。

(3) 進路指導

①進路指導部が主体となって、3年間を見通した系統的なキャリア教育計画の充実、改編を図り、一年次から生徒が自らの進路・将来について深く考え、主体となって行動できる態度を育成する。

②各学科の特色を生かした進路指導を実施し、学習を進路に結び付けていく。特に資格の取得を励行することによって、自己肯定感や向上心を育み、進路活動へチャレンジする姿勢を身に着ける。

(4) 学校経営

①教育情報部を中心に、ICT やオンラインを活用した授業研究に取り組み、授業力の向上及び業務の改善を図っていく。

②企画調整会議と教科主任会を基盤に据え、スクール・ポリシーに基づいた経営課題の解決と経営方針の徹底を図ることで組織的な対応力を高める。

③会議の効率化、コミュニケーションの充実、業務の簡素化等を図り、教職員のライフワークバランスの健全化を図る。

④継続して経営企画室の業務適正化を図り、健全な職場の確立に一層取り組むと共に、教職員と経営企画室の連携を強化し、全職員が一体となった学校運営を推進する。

(5) 防災・安全

①地域連携の充実を図る。また、災害時の支援活動において、適切な役割を自ら判断し行動できる生徒を育成するために、実際の被災を想定した防災訓練の実施を図る。

②「マイタイムライン」の活用や、地震の要因や災害発生時の関係機関の役割、応急手当等、自然災害に関する正しい知識を習得し、災害時の安全指導に取り組む。

(6) 健康推進

①生徒一人一人の心身の健康を図るために、教育相談（特別支援）委員会を中心にスクールカウンセラーと連携を図り、組織的な連絡相談体制を確立する

②自立支援活動を推進するために、「都立学校発達障害教育推進エリアネットワーク」を活用し、特別支援学校との連携を深め、個別の支援計画を充実させていく。

③「TOKYOACTIVE PLAN for students」を参考にし、教科指導、学校行事、部活動などあらゆる機会を通して体力の向上・健康的な生活習慣の維持・向上を図り、生徒の心身両面の健全育成を図る。

④「with コロナ」、新しい生活様式により感染症対策に努めながら、生徒が学校で喜びや実感を得られるような教育活動を展開し、生徒の実体験の充実を図る。

(7) 募集・広報

①学科ごとのアドミッション・ポリシーを地域や中学校に浸透するよう努め、併せて野津田高校の魅力や改善・変化しつつある特徴を内外に強く発信することによって、中学生や地域からの評価を向上させる。

②教科指導、特別活動、部活動などすべての活動を通して、生徒の帰属意識と学校への愛着、自身の成長の実感度を高め、魅力ある学校づくりを推進する。

③HP や SNS を活用した広報活動を充実させると同時に、説明会や学校訪問、地域との交流を通して「情報の発信」を全教職員が強く意識し、募集・広報活動に積極的に関わる。

④保護者への発信力を高めると同時に、PTA との連携を図り、家庭と一体となった教育活動を推進する。